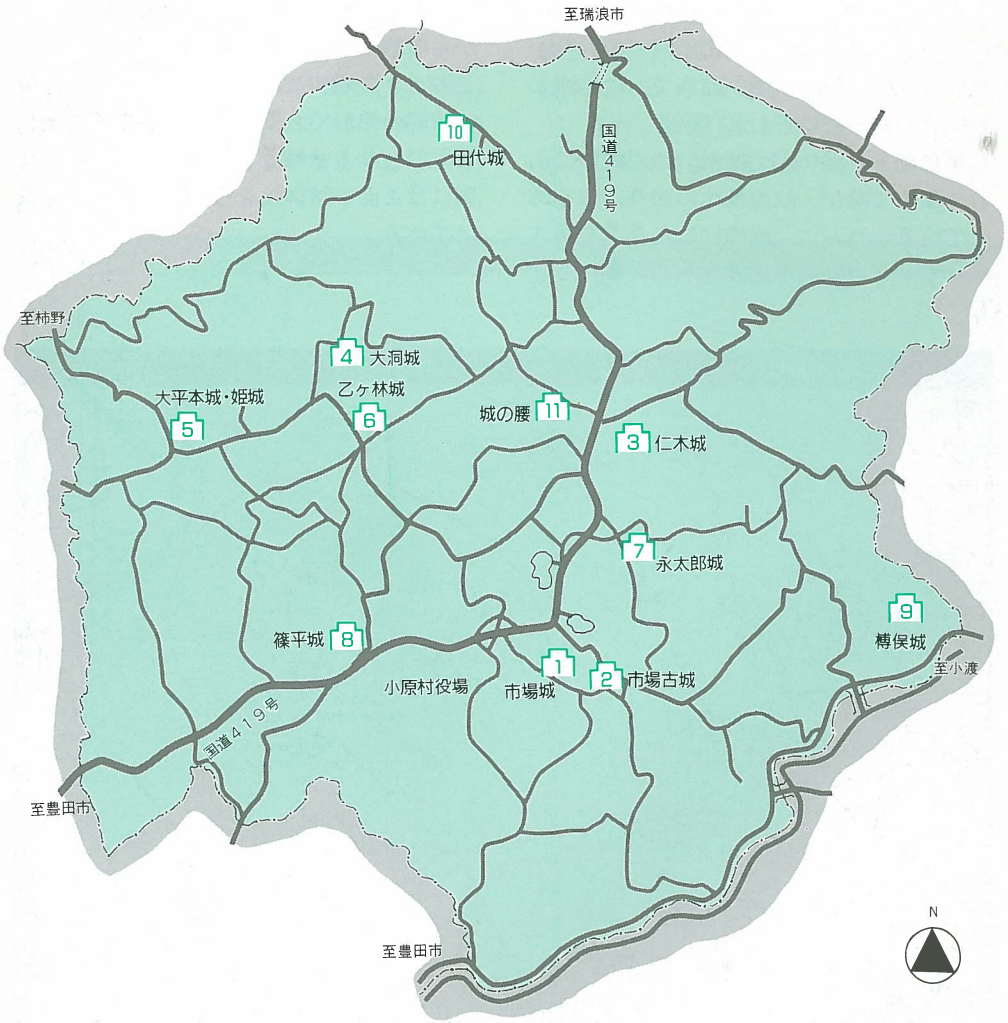
城址位置図



愛知県西加茂郡小原村教育委員会
小原村文化財保護委員会
作図：千田嘉博／1993.3

平成４年度愛知県地方振興補助事業

小原の城郭

◆山城の歴史◆

日本列島の城郭の出現は、村のまわりに堀を巡らした弥生時代の環濠集落に遡る。古墳時代になると、古墳を築いた地域の首長たちの館が立派な堀や土塁で守られた。しかし、奈良時代以降、中央の律令政府が成立し軍事権を独占すると、各地の館城はつくられなくなった。７世紀には朝鮮半島からの攻撃に備えて朝鮮式山城が国家によって築造された。

鎌倉時代になると武士の日常の拠点として櫓門などを備えた館がつくられた。しかし堀や土塁は未熟で、大規模ではなかった。本格的な防御施設を備えた館が現れたのは南北朝期であった。この時代には楠正成の千早城のように、高い山の上に臨時の砦が構えられた。戦うことだけを目的に険しい地形が選ばれたので、人工の防御施設は発達しなかった。

室町時代になると日常の館とセットになった山城が村々につくられ、不断に維持された。館と山城の機能を合わせた館城など、城をつくった主体の権力に応じて、多様な城が生み出された。地域ごと、あるいは大名ごとに城の特色も鮮明になった。戦国・織豊期はもっとも活発に城が築かれたが、城下町集住政策や一国一城政策によって急激に村の城は廃止され、江戸時代を迎えた。

◆小原の城郭◆

小原村に残る城館跡は村の豪士によってつくられた中世の城跡であり、現在11城が確認されている。しかし、これらの城について記載した文献は極めて少なく、城の歴史的背景を知ることは困難である。この冊子は現在残っている遺構から当時の城の形状や構造を明らかにし、後世へ記録として残すために作成したものである。

現地にいってみると天守閣も門もなくただの山にみえるが、よく見ると尾根を切った堀の跡や、屋敷を構えた平らな場所が残っている。中世の城跡は土を切ったり盛ったりしてつくられていたのである。愛知県の中でもこれほどまとまって中世の城跡が保存されている地域はまれであり、私たちは城跡を実際に歩くことで、４００年ほど前の戦国時代の小原村を今も体感することができる。

◆用語解説◆

◆縄張図（なわばりず）
地表面に残された遺構を観察し、城館全体の形状や構造を把握するための図。

◆曲輪（くるわ）
堀や急な斜面などで守られた城館の堀削地。近世の城郭の本丸、二の丸に相当する。

◆堀切（ほりきり）
山城で尾根筋を断ち切った堀。斜面に堀を延ばした部分は竪堀になる。

◆土塁（どるい）
曲輪の端などにつくられ、城兵の盾となった盛り土。

◆虎口（こぐち）
城館の防御された出入口。門が構えられたところ。

◆枡形門（ますがたもん）
もっとも発達した虎口の一種。まっすぐ城内に入れないように道を曲げ、特別な広場をもった出入口。

◆櫓台（やぐらだい）
物見や防御の拠点になる櫓が備えられた、土や石垣の台。

浅野文庫　諸国古城之図「市場城」（広島市立図書館）

1 市場城(大草城)

市場字城、深見

市場城は、標高380mの山頂に立地し、麓からの比高差は80mと小原村の中で最も大きく城郭としても最大である。現在見られる遺構は、天正11年(1583)、第四代城主鈴木越中守重愛(しげよし)によって改修された城郭である。また、東の尾根先には、「市場古城」があり、市場城改修後も古城と合わせて使用していたと考えられる。

山頂の曲輪①が本丸跡であり、その南東面には石垣、土塁が築かれている。当時は「諸国古城之図」に見られるように回りは総石垣づくりであった。現在はほとんど確認できないが、曲輪の内部は石垣による内枡形が築かれており、厳重な守りであったと考えられる。

曲輪①の南は櫓跡と言われている曲輪が二段に続いている。この曲輪にも南西全体に荒い野面積みの石垣が築かれている。さらに、敵の直進を防ぐためこの曲輪の石垣には曲がり角が付けられており、石垣の規模とその構造から市場城を象徴する遺構である。曲輪②は曲輪①と同程度の広さをもち、北東の守りを固めている。

曲輪②の北から本丸の北下段にかけて堀底路③が回っている。途中、若干の石垣跡が外枡形の名残を留めている。堀底路③の北西に延びる尾根は、2つの堀切⑨、⑩により遮断されており、尾根からの侵入を困難にしている。

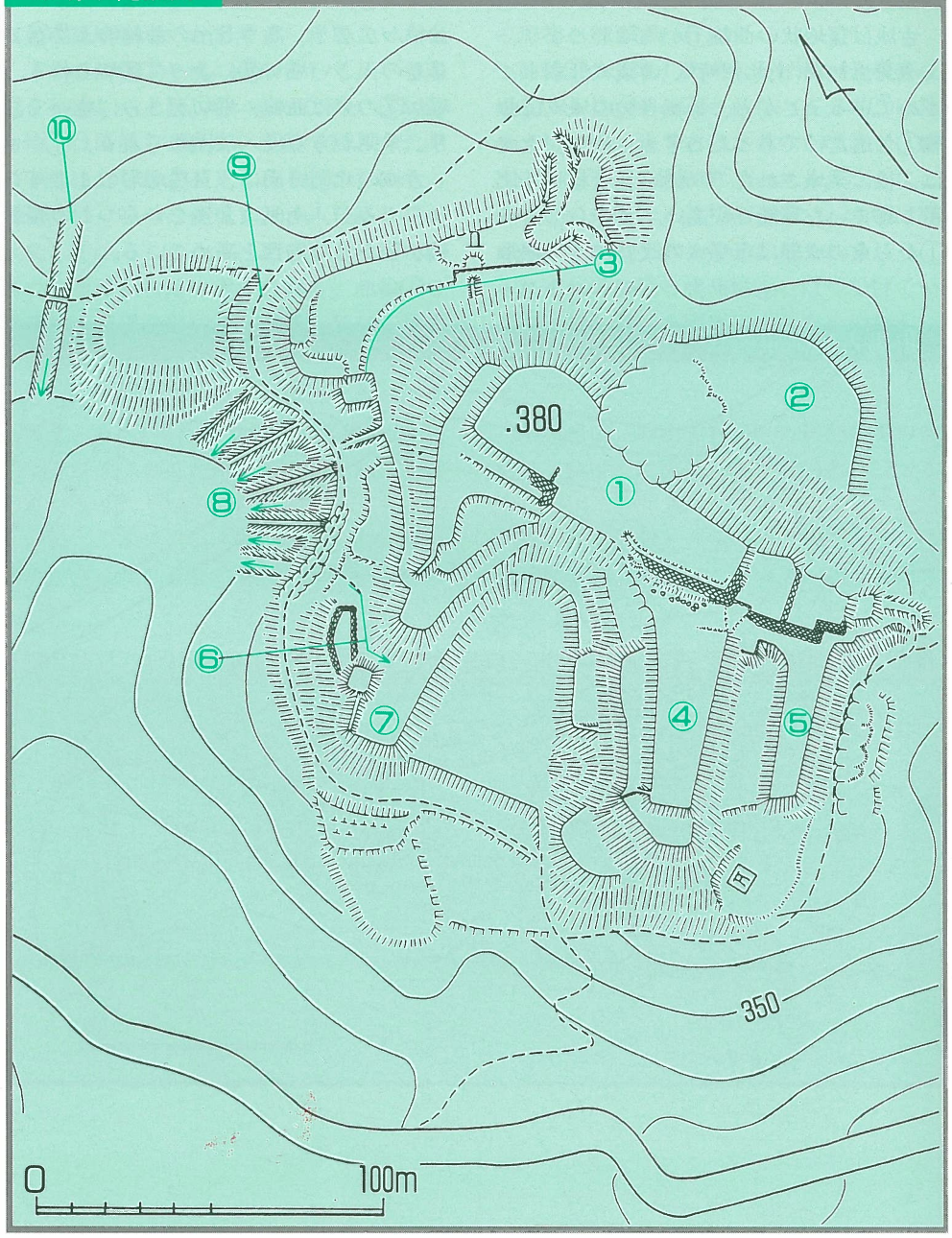
曲輪①の南は、出丸的な曲輪④、⑤が延び、その間を空堀として活用している。曲輪④の南先端には、眼下に見える「お宮」の方向にわずかな石積も見られる。曲輪①の南西は馬蹄形を思わせ、その内側に3段の帯曲輪が築かれている。

また、尾根続きを途中で切った堀切と石積が外枡形門⑥を形成している。2回の曲がり角が付く複雑な構造は、室町時代後期の虎口であり、改修当時としては最新の形式であった。外枡形門から城内に入った南の曲輪は昔から「さんざ畑」⑦と呼ばれ、家老尾形三左衛門(さんざえもん)の屋敷があったと言われている。

外枡形門の北には畝状空堀群(うねじょうからほりぐん)⑧が見られる。愛知県内では、市場城と小渡城で確認されているのみである。畝状空堀群は竪堀と竪土塁を斜面に沿って連続させることによって、敵の横移動や集団行動を防ぐものであり、戦国期に多用された堀の形状である。しかし、この畝状空堀群の上部は、堀切⑨から続く城道によって破壊されている。このことは、戦術の変化に伴い竪堀から横堀を主体とした城づくりへ移行したことを示している。

当時の築城技術の発達は、市場城大改修にも反映され、これまでの城郭を根本的につくり替えたものであった。曲輪①の総石垣化、石垣づくりの外枡形門⑥、竪堀から横堀への変化した畝状空堀群⑧の遺構は、市場城が中世の城郭から近世の城郭へ転換したことを示す城であり、中世の城郭史上からも貴重である。

市場城縄張図



② 市場古城（古城）

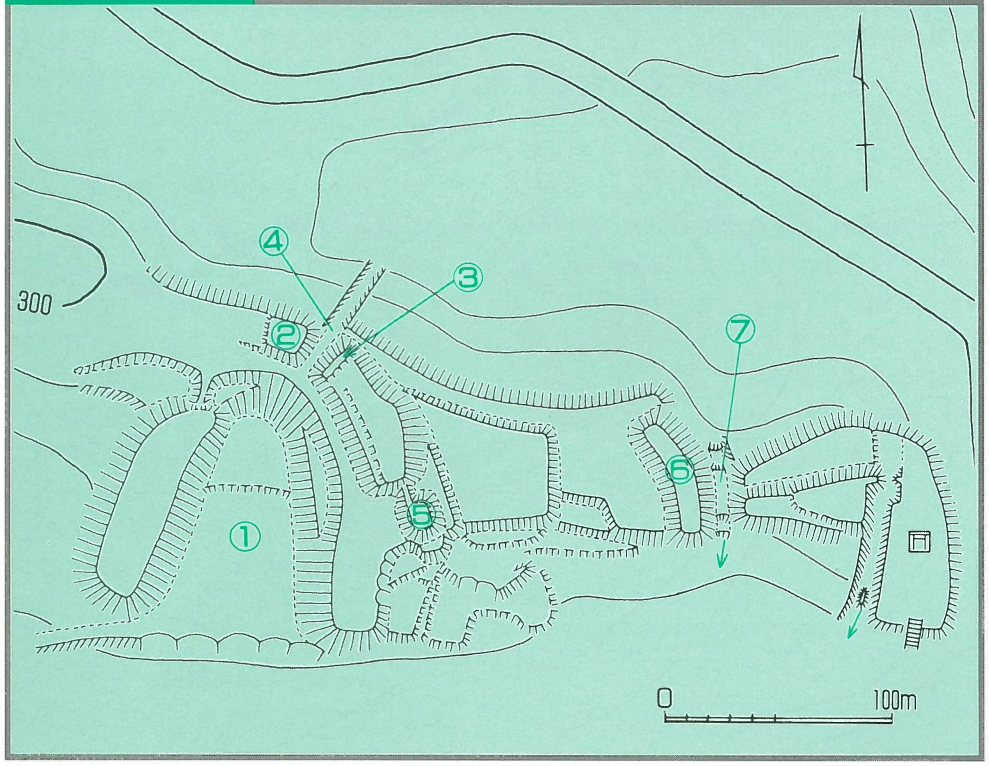
市場字市場前

市場古城は比高差20mの西から東に延びる尾根に立地した館城である。この尾根の西続きの山頂には「市場城」がある。

古城は窪地状の曲輪①が馬蹄形となり、山城発生初期（南北朝時代）の築城形式をとどめていることから、築城当初の城域は曲輪①付近だけであったと考えられる。古城は、後に築城された「市場城」と合わせて使用されていた可能性が高いことから、曲輪①から東の城郭は市場城の改修に伴い拡張されたと思われる。曲輪①の北には、櫓台的な土塁②と土塁③を構えた虎口④、東には櫓台⑤が見られる。さらに東へと二段の曲輪が広がり、高さ５ｍの曲輪的土塁⑥と落差の大きい堀切⑦によって区切られる。堀切⑦の東は曲輪、堀切がさらに続いており、東側からの侵入は困難である。

古城の北側斜面は、自然地形のまま落されているが、南側は全体をいくつもの腰曲輪が築かれ防御性を高めている。

市場古城縄張図



③ 仁木城（城ヶ峯）

上仁木字豆畑・下仁木字蔵屋敷

仁木城は標高440mの山頂に立地し、麓からの比高差が60mと、市場城を除いて、村内の他の城よりも大きく、小原でも有力な城主が居城していたと考えられる。

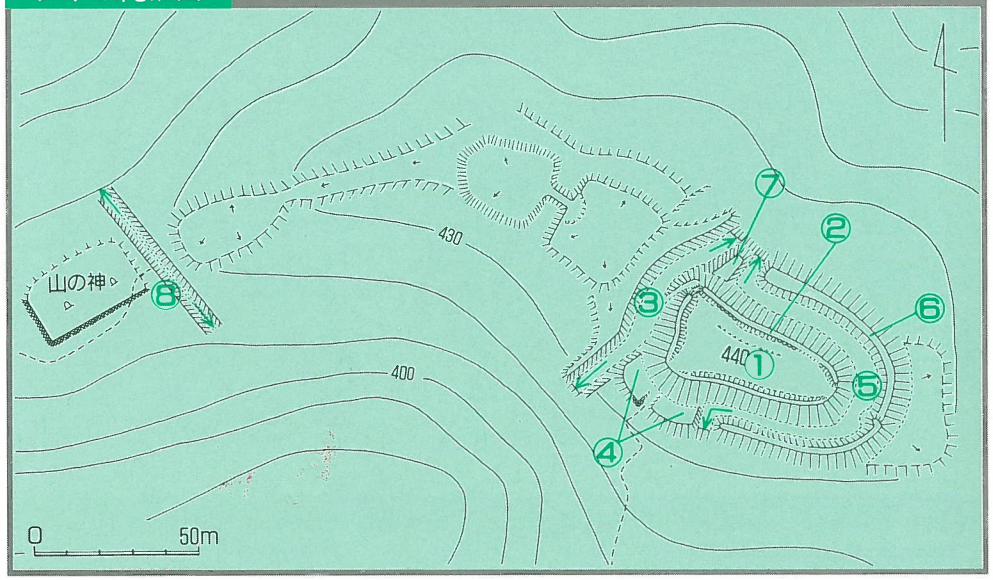
山頂の曲輪①を城の中心として、その周辺を発達した土塁、堀、堀切で守っている。曲輪①は周囲を一段高い土塁で囲み、北側の一部には石積②が見られる。さらにその周辺には、石垣に使用したとみられる石が散乱していることから、恐らく当時は総石垣づくりであったと考えられる。曲輪①の北西へ大規模な堀切③が東西へ延びる尾根を遮断し、先端を竪堀として斜面へ落している。堀切③の西には、曲輪的な平地が2ヵ所見られ、さらにその尾根続きの西には、両端を斜面に落した堀切⑧が見られる。この堀切⑧が仁木城の西端である。

曲輪①の南西にある2ヵ所の腰曲輪④は、中央が窪地状になり、角にわずかの石積が見られ桝形状の虎口となっている。当時は総石垣づくりであったと考えられる。堀切③の中央に曲輪①へ登る斜面があり、虎口の形状を残している。

曲輪①の北東、南東にかけて、大規模な堀⑤、土塁⑥が巡らされている。堀⑤は築城当初は帯曲輪であったものを改修し、後に土塁⑥を築いたと考えられる。さらにこの堀⑤の北端は土塁⑦の手前で、南端は腰曲輪④の虎口手前で斜面に落されており、それぞれ堀切③と腰曲輪④とはつなげていない。敵の侵入を困難にするための細かい工夫がされ、築城技術の発達をうかがわせる。

仁木城は、石垣を利用した桝形の虎口と曲輪、細部を工夫した堀が見られることから、戦国末期に完成した城郭であり、村内の城郭でも発達した遺構を見ることができる城である。

仁木城縄張図



④ 大洞城

大洞字簗ヶ沢、大麦田

大洞城は丘陵頂点に立地し、城郭の規模は小原村内の城でも比較的大きい。

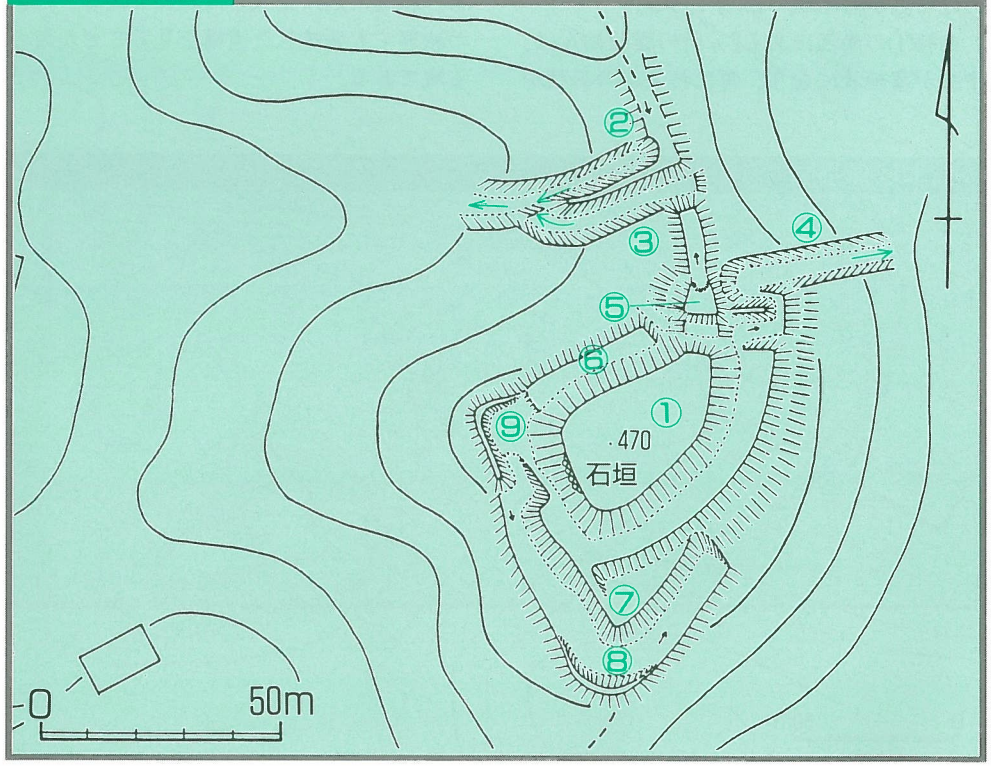
城郭の中心は曲輪①であり、その南西には自然崩壊が激しいが幅３ｍに渡り荒い野面積みの石垣が認められる。これは、石垣構築技術が伝えられた戦国末期までこの城が使用されていたことを裏付けるものである。

曲輪①の北側は、３本の竪堀②、③、④により守られ、いづれも斜面に落ちており、敵の横移動を防いでいる。さらに、竪堀④の上部を土塁⑤と組合せることによって、曲輪①への侵入を困難にしている。曲輪①の３方は複雑な構造の帯曲輪⑥、⑦、⑧が３段に巡らせてあり、正面の防御性を高めている。⑨は北西を土塁に囲まれた櫓台と思われる。⑨から石垣下段にかけての曲輪が狭められており、虎口的な形状が見られることから恐らく城内への入口と考えられる。

櫓台から西に下ると、しばらくは自然地形の尾根が続き、その先に出丸的地形が現われる。しかし、城郭の遺構として断定するまでにはいたらない。

大洞城は、石垣の構築、竪堀と土塁、複雑な構造の帯曲輪のように発達した遺構が見られることから、戦国末期に城郭の改修が行われたことは明らかである。

大洞城縄張図



⑤ 大平本城・姫城

大平字下大屋敷、上大屋敷

本城と姫城は隣接しており、規模の大きい本城を主城とすると、姫城は分家的考えのもとに築かれた城と思われる。いづれにしても、２城で１つの城として機能していたと思われる。

●本城

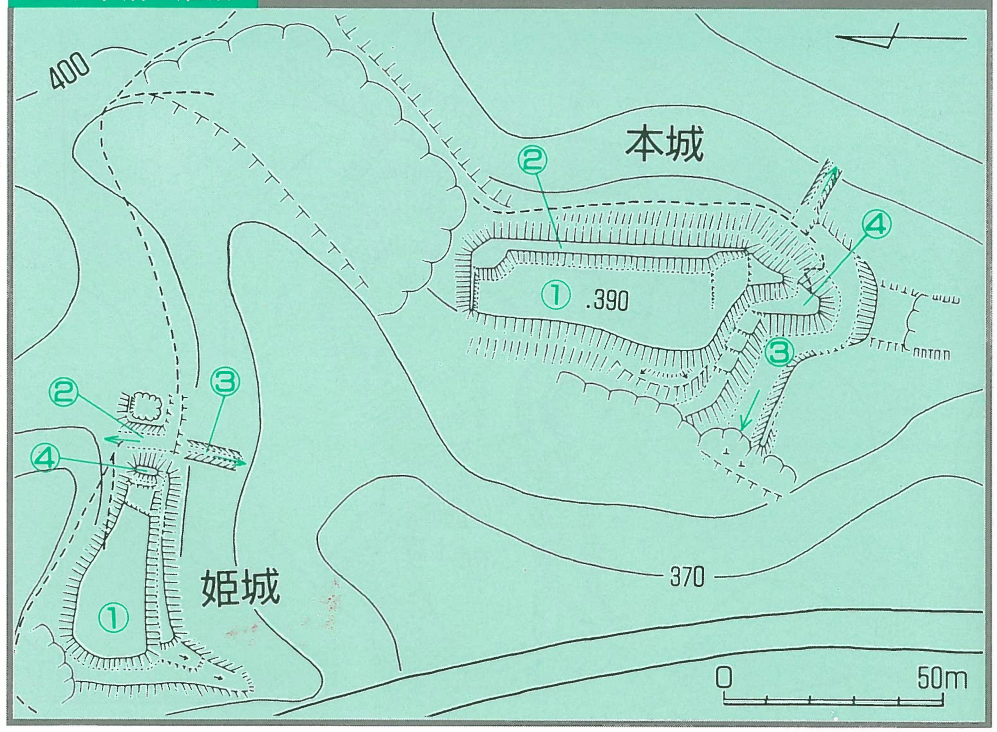
平坦な曲輪①を主郭として、その背後(東)を高さ２～３ｍの土塁②が南北に一直線に延びている。この土塁の北端には櫓台と思われる平坦部がある。曲輪①の南西にかけて曲輪が巡らされ、その曲輪に沿った最下部の帯曲輪③はその両端を竪堀に落している。さらに腰曲輪④からは帯曲輪③の竪堀が眼下に見え、竪堀を登る敵に横矢射ができる構造にしている。

●姫城

比高差20ｍの曲輪①を主郭として、東から延びる尾根を堀切②と土塁④で遮断し、南へ回り込む敵は堀切②でつながる竪堀③で防いでいる。堀切と土塁による防御方法は中世の城郭の原形である。中心の曲輪①の南側下段には数段の腰曲輪が見られ、正面の防御性を高めている。

本城、姫城とも現在見られる遺構は、戦国末期に整えられたものである。

大平本城・姫城



⑥ 乙ヶ林城

乙ヶ林字信田

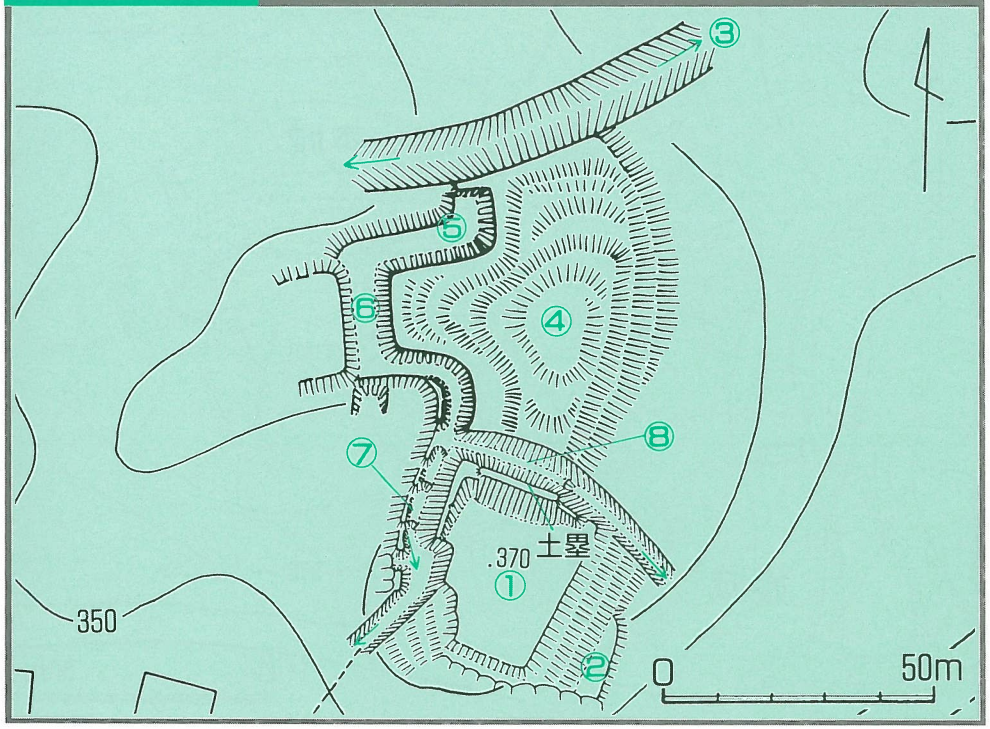
北から延びる比高差20mの尾根に立地。北西の守りを強く意識した館城的な城郭である。尾根先端の主郭となる曲輪①の北西を形状の違う２つの堀で防御している。

曲輪①の南東は急斜面で東側斜面に腰曲輪②が見られる。城郭北端の堀切③は規模も大きく尾根続きを遮断。両端を谷に落し込み、敵の回り込みを防いでいる。この堀切から真南の尾根④には手が加えられた跡はない。城郭として発達する戦国末期になるとこの部分も曲輪に活用する予定であったのだろう。尾根④の西には、切れることのない一連の堀切⑤、⑥、⑦がある。これらの堀は帯曲輪的役割とあわせて堀底路としても活用されていた。さらに、堀切⑥は東西に延びる尾根を遮断している。堀切⑦は先端を斜面に落された竪堀としての役目も担っている。このように、一連の堀が通路、堀切、帯曲輪といくつもの役割を果たしていることがこの城郭の特徴といえる。

曲輪①の北側は、一連の堀切⑤、⑥、⑦とつながる堀切⑧で守られている。堀切⑧の東側先端は曲輪①の斜面に沿って落され、堀切⑧、曲輪①の間は高さ３mの土塁により厳重に守られている。堀切と土塁の組合せによる防御方法は、中世城郭の原形である。

曲輪①は現在竹林であるが、城郭の中心として機能していたと思われ、その広さから見て“館”があったと考えられる。

乙ヶ林城縄張図

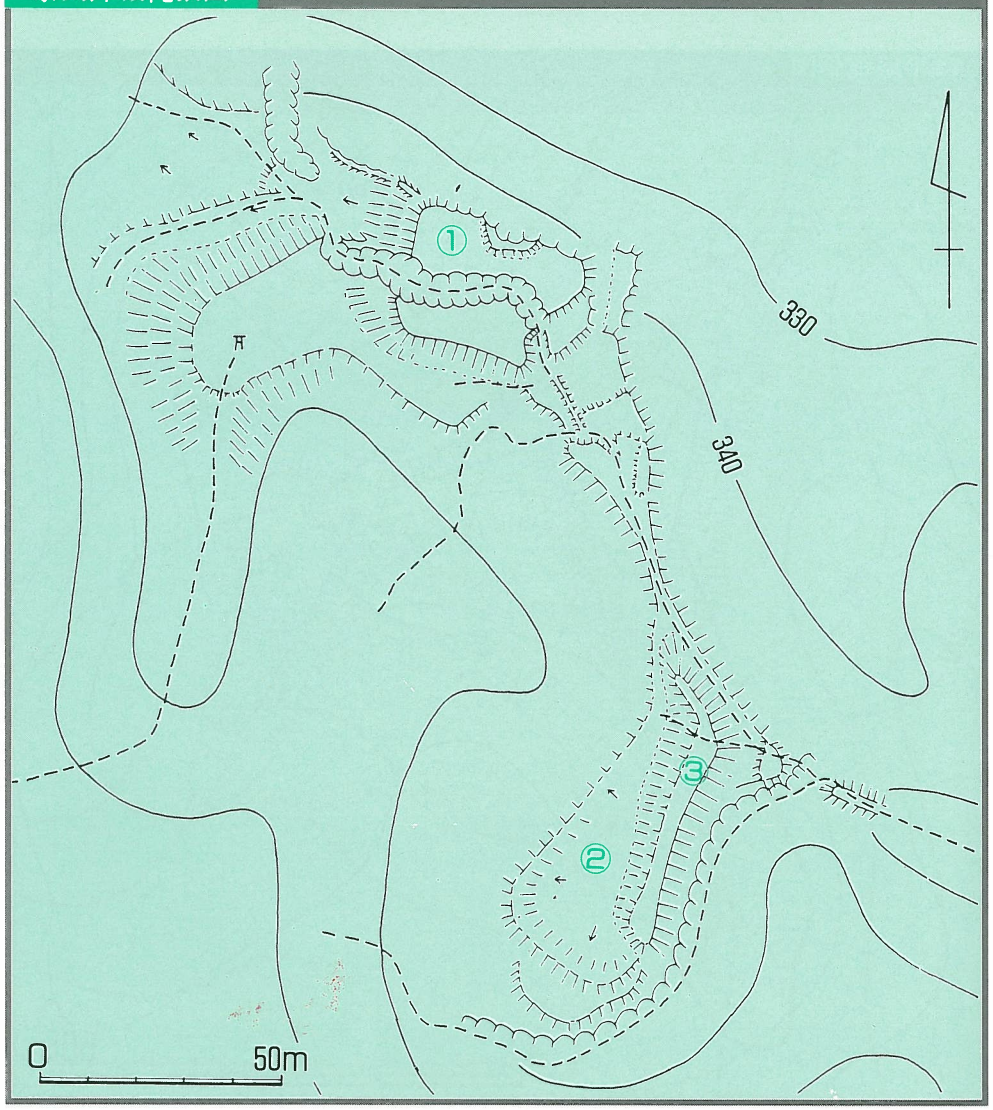


⑦ 永太郎城

永太郎字泊り

永太郎城は、比高差30mの丘陵頂部に立地した“砦”的な城であったと考えられる。長い年月の自然崩壊により現状はかなり荒れており、遺構は不明瞭であるが、曲輪として①・②が考えられる。また、曲輪①の東側にも曲輪的な平地が３段に続く。曲輪①から尾根伝えに東へ進むと曲輪②へ入るが、自然地形的な部分が多く曲輪として断定はできない。曲輪②の北には土塁的なものが見られる。

永太郎城縄張図



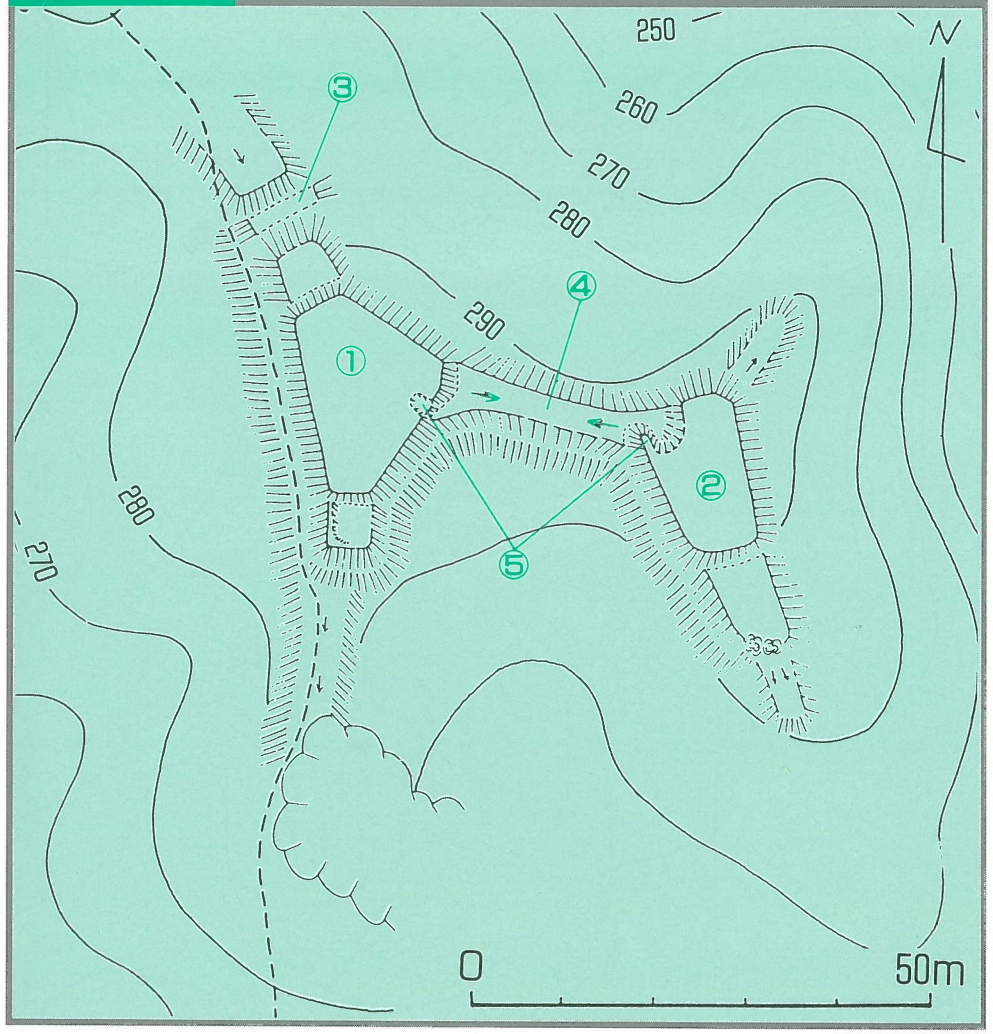
⑧ 篠平城

北篠平字大麦田

北から延びる比高差40mの尾根先に自然の地形をそのまま利用した形で立地している。しかし、北側の標高300mの高い峰を利用せず尾根先を利用していることから、城の南の街道筋を守った“砦”的な城郭と考えられる。

城郭は、堀切③により北からの尾根を遮断している。左右への回り込みはなく、堀切としては未熟である。中心の曲輪①は②より広いことから本丸に相当すると思われる。両間を曲輪から1段下げた細い通路④によって結んでいる。通路と曲輪の接続部は窪地状となり、明瞭な虎口⑤となっている。

篠平城縄張図



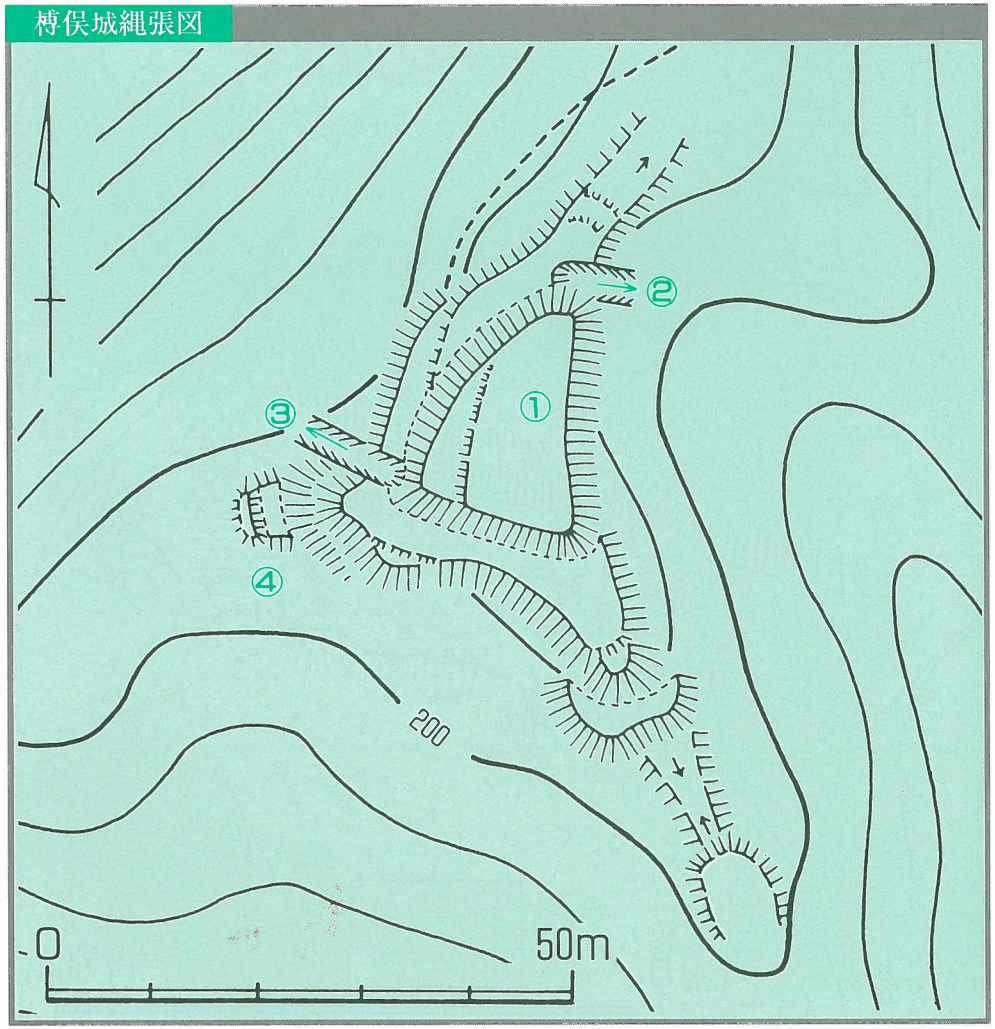
⑨ 榑俣城

榑俣字穴畑

榑俣城は標高210m、比高差約70mの山頂に立地する。城の遺構は完全に残っている。①が主郭の曲輪で、西側が一段低くなっている。曲輪①の背後（北）の尾根続きには堀②が備えられる。尾根筋を完全に堀りきらず主郭縁部のみを守るのは、尾根道を利用した連絡を重視したためであろう。③は曲輪①を囲む帯曲輪を区切る竪堀で、その上部には簡単な橋を渡して行き来していたと想定される。城から南西に延びる尾根には堀切④がつくられ厳重に守った。

城からの眺望は抜群で、境や小原郷内の見張りにもこの城は活躍したと考えられる。山が険しく、また曲輪一つひとつは大きくないので、山麓の要所に平時の館があったと思われる。

榑俣城縄張図



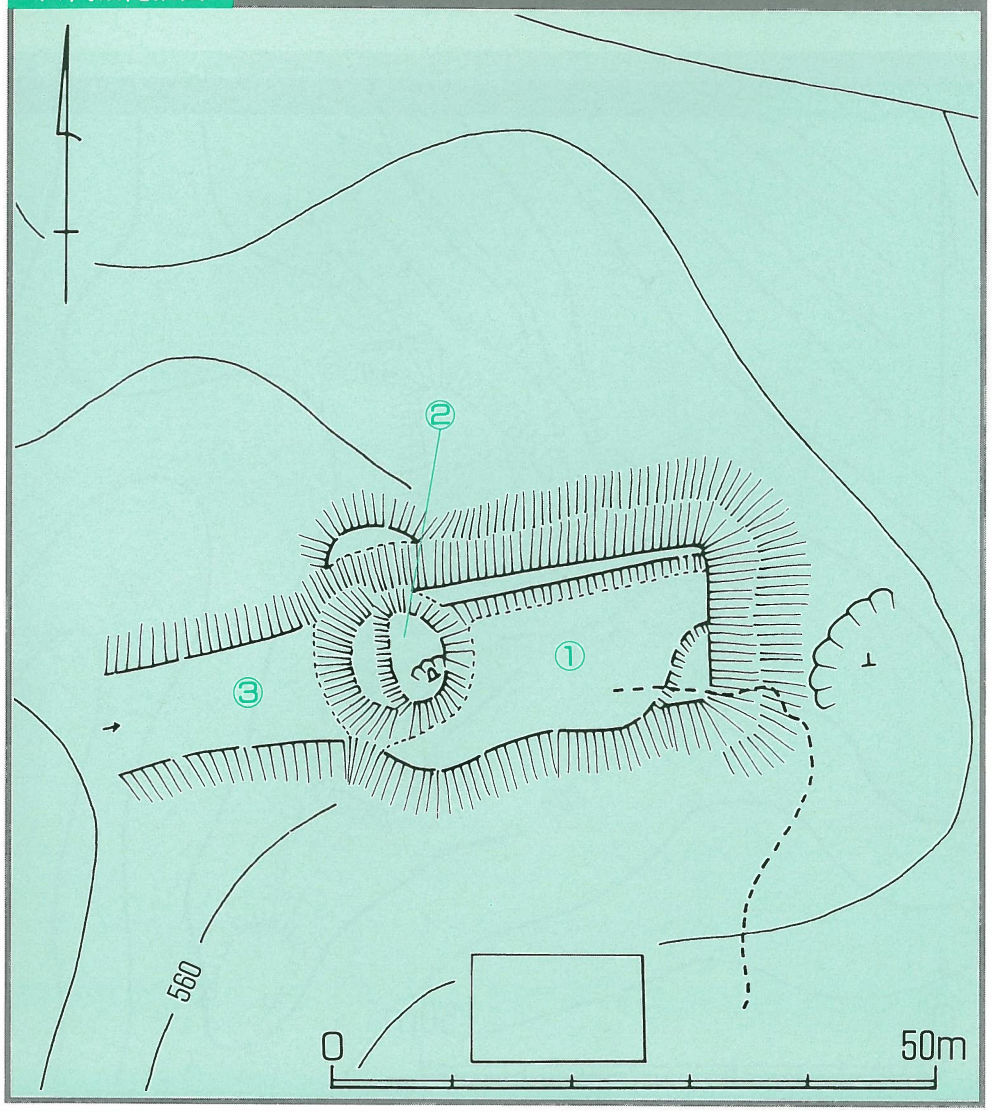
10 田代城

田代字傳具

田代城は標高約560m、比高差約10mの丘陵先端に立地する。

単郭の小規模な城館で、曲輪①の北側に低い土塁を備える。②はマウンド状の土塁で、櫓台として機能していたと考えられる。③の部分には本来、城館と背後(西)の尾根続きを区切る堀切があったはずだが、現在は痕跡がない。後世埋め戻されたのであろう。また、曲輪①には井戸があったと言われているが現在は確認できない。

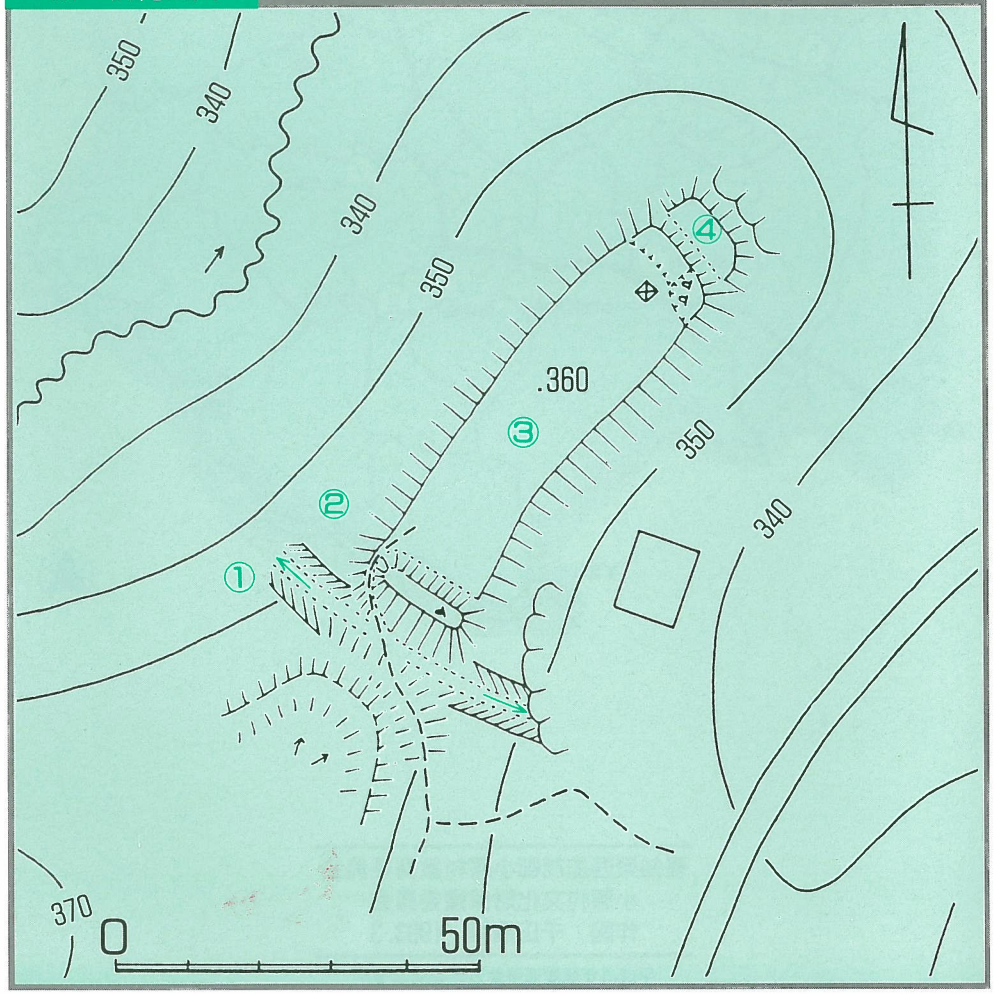
田代城縄張図



11 城の腰

上仁木字城之腰

北から延びる比高差20mの尾根先に立地している。遺構は比較的よく残っており、城郭全体の規模は小さい館城で、仁木城との関係があったと言われている。

尾根続きを堀切①で遮断。この堀切は山の斜面まで延び、敵の横への回り込みを防いでいる。さらに、城内には土塁②を築き堀切①からの侵入を困難にしている。この北側の堀切と土塁により、背後(尾根北側)からの敵に対しての防御性を高めている。このような堀切と土塁による防御形状は中世城郭の原形である。また、土塁の内側には主郭となる曲輪③をもち、さらにその南側には正面の防御性を考えた腰曲輪④を設けている。

城の腰縄張図